ベルクソンに於ける生と記憶

山下智志

生きて在るということは，単に存在しているというだけではなく，自らが成熟し，ふとり，やがて老いる過程でもある。自分が成長してきたということを私たちは記憶によって知る。いや，それだけではなく自分を取り巻いていたものもまた変わってきたことを認める。想い出によって私たちは過去の世界と結ばれつつも分かたれている。自分が〈いま，ここに〉生きてあるという自覚と記憶との間にはあるつながりが存在する。だが，記憶と私たちの生はより具体的にはどの様な結びつきの内にあるのだろうか。ベルクソンという哲学者はこの問題を追求し続けた人として捉え得る。私たちは彼と共に生と記憶の関係を追ってみようと思う。

I

『創造的進化』では生命体について次のように述べられている。「……生物は自然みずからが孤立させ閉じたものである。生物は異質な諸部分が互いに補い合って組み合っている。それらは互いに入れ子になった様々の機能を営む。それは個体であり……」[1)]。

自然に対して自発的な活動性（能産性）が認められており，その所産，というよりもむしろ自己限定として個々の生物があるとされている。生物は物理的には身体の有する皮膜によって周囲と自己の境界を画しており，このまとまりに於て機能を果たすべく自らの構成要素を有機的に組織している。それは自己の作動上の閉域をもつ存在である。

私たちもまた生きものである。如上の生物の営みはどの様な性格を有するの

1) E. C., p. 12.（略号等については30ページを参照のこと。）

であろうか。

『物質と記憶』に於て，ベルクソンは生物としての人間の活動様態を詳細に分析・記述している。彼によれば，私たちの活動を形成しているものに3つの相がある。それは「純粋知覚（perception pure）」，「感情（affection）」，「記憶（mémoire, souvenir）」である[2)]。

生物の活動は基本的に，おのれを取り巻く物質の総体から自己の感覚器に関係づけられた領野を切り出し，これを運動器を通した自己の行動の及び得る場として用いるという，円環的構造を有する。知覚された世界の部分は私たちの可能的行動を示すのであり，認識と行為は相即的あるいは相互限定的である。ここで感覚器によって切り出され表象とされた領野が純粋知覚と呼ばれ，この表象はもの自体と異ならぬとされる[3)]。

ところで，身体は数学的な点ではなくひろがりを有する。私たちは外界から惹き起こされた身体の運動性反響についての意識，即ち状況に応えようとする身体の現実的努力の意識をもつ。これが感情である。この内感によって主客はすでに分かたれているのである。感情は知覚に必然的に混入するものであるが，他方，あらゆる感覚が身体の運動を伴うのであるならば，それが視覚的なものであれ聴覚的なものであれ，私たちの認知活動はつねに触覚的体験であることを示す。（感覚でもあり感情でもあるのが触覚である。）

自己に固有の状況を絶えず切り拓き，それを問題状況として身をもって応答しようとするのが私たちの営みである。この問題・応答の環は必ずしも一義的に決定されているのではない。神経システムとりわけ大脳の構造上，感覚器と運動器の直結は保留され得るのであり，この分離がある故に感覚―運動連関の組み合わせには無数の可能的パターンが存在する。そのうちのどれが実際の行為として表出されるかは主体の側の決定によるのである。このような状況の解釈を指導するもの，主体の行動に方向づけを与えるべく現在の状況に介入して

---

2) 純粋知覚と感情については，M. M., chap. I の全体を参照のこと。なおベルクソンは mémoire と souvenir に明確な区別は設けていない。

3) 純粋知覚は作業仮説上存在する知覚であり，実際は記憶の働きに侵されている。純粋知覚の当否については措かせていただく。

くるものが記憶であるとされる。そして記憶こそ意識であり精神である。実際私たちの意識が記憶を欠いた精神であるならば，私たちは単純な語の認知さえ行い得ないであろう。語の知覚は，物理的には連続的に継起し現在を占めては過ぎ去って行く個々の音声を意識の内に記憶として保持し，それらを一つのまとまりとして凝縮して捉えるのでなくてはならない。又，視覚に於ても，例えば運動を捉える時，私たちは過去の像を保持しつつ絶えず新たな視野に置きなおしていく作業を通してはじめて，運動が描く形を捉え得るのである。記憶には記憶内容の保存と諸瞬間の収縮という２つの側面がある。意識に於て捉えられた如上のまとまりは，ある相貌を有する表象を形成するが，ここで記憶―過去と呼ばれるものが主体の活動に方向付けを与えるという事態を分かり易くする為に，ある事例を考えてみよう。

発話行為，より具体的には講演を行う場合を考えてみよう。私たちは絶えず語を発するという活動を行っているのだが，一貫した話を行うには，それまでに語った言説を表象としつつ，これが意識に於て参照されている必要がある。だが，この表象は単に並置された語の集積としてあるのではない。それは「話の流れ」，「意味のまとまり」とも云われるべきものを形成している。私たちは自分が「話を踏み外した」とき，即ち不適切な語を発した際，そのことを即座に認め得る。また「興に乗れば」自分でも思いがけない様な表現が自然と口をついて出て来る。また他人との対話の場面に於て，私たちは自分と相手が発したものの総体を意識に於て参照しつつ言葉を交わす。双方によって形成される話の流れに於て，私たちは自分が話の主導権を握っている意識，あるいは逆に，相手に話を奪われてしまった意識を経験する。私たちが身を置いている流れ―過去の総体には，発すべき語に対する期待があり，来たるべきものの先取を行わせる働きがある。そして，この流れは個人的な意志の働きに単純に従属する筋合いのものではない。

ベルクソンが記憶と呼ぶものは時間軸上の過去―現在―未来の配置に特定できぬ独自の存在様式をもつ。それは過去にあると同時に未来にもある。（捉えられた過去が同時に未来の関数として働いている。）この記憶を対象化して摑むには，私たちは相互独立的な要素（ことば）の表象を手がかりとする他ない

のだが，これらの要素は，記憶の力によりお互いを区別しつつ他を反映するという形で有機的に結びつけられることによって，未来を産出する力を得ている。このような意識―記憶の在り方をベルクソンは「持続（durée)」と呼ぶ。強いてこれを何かに喩えるならば，それは音楽のメロディーの展開が示す相に似ている。

持続の自発的運動の表出，あるいはその自己限定として私たちの活動がある。（限定があると云ったのは表出されるべきものの選択があるからである。）また，記憶に訴える私たちの能力とは構想力と呼ばれるべき筋合いのものと云えようが，この構想力は，身体がその個別感覚が切り拓いた状況に対して自らのまとまりを維持しつつ応える傾向があることからすれば，諸感覚を統合する能力のことでもある。

II

記憶が空間上の特定の位置を占めるものでないということは，心身関係の問題にこれを敷衍する時，精神としての記憶（過去）が脳の特定の部位に座を占めるものでないこと，刺激が中枢のある部位に達すれば自働的―機械的に状況を解釈する観念・意味が引き出されるのではないことを示唆する。『物質と記憶』の主眼の一つが，膨大な記憶疾患の事例を詳細に検討することを通して，記憶―精神がおのれの力で自己を保つ即自存在としてあり，身体から独立性を有していることを実証する点にあったことは云うまでもない。だが，ここでその過程を再現するわけにはいかない。そこで，彼の主張が機械論的仮説よりも分があることを示す手がかりを提示してみよう。

ベルクソンによれば，脳に記憶が蓄えられるとは，保存という問題を容器と内容物の関係として空間的に考えているのである。だが，あるものが他のものの内にあることを示したからといって，保存という事態は毫も明らかになりはしない。今度は脳が自らを保つ力を有さなくてはならぬであろう。そして，物質としての脳がそうであるならば，脳を包み込んでいる容器としての物質界もまたそうであろう。私たちは記憶の問題を考える時，どうしても，自らの力で

自己を保つ存在を端的に認めざるを得ない。

だが，物理的存在としての脳は様々な運動のネット・ワークでしかなく，それ以外の何ものでもない。そこでは刻一刻と状態の変化が継起し，各々の状態はつねに現在を占めては過ぎ去ってゆくばかりである。このような現在の内には如何にしても過去は位置を占め得ないのではないか。人はヴィデオやカセット・テープといった様々な記録装置を引き合いに出すであろうか。だが，再生されるものはつねに現在としてあるのであり，それが過去性を有するのは，そこで再生されているものを過去へ送り返し過去と関係づけ得る存在に出会う場合のみである。再生されているものは過去を演じているのであり，過去そのものではない。「純粋で単純なイマージュは，実際，それを私が探しに行った過去でなければ，私を過去とつなげないであろう。」[4)]

語の聴き取りと読書行為の場合を考えてみよう。知覚によって身体に惹き起こされた運動性反響が自働的・機械的に対応する観念・意味を引き出すのであろうか。だが，同じ語でも発せられる音の高低・抑揚等は様々であり，それによって身体が被る変容もまた異なるであろうことはすぐに認め得る。又，語は一般に，一定の文脈に置かれることによってはじめて特定の意味を担い得る。語が入り得る関係は様々である。さらに，私たちは斜め読みという読書行為が可能な一方で，逐語的にテキストを知覚していってもそれが云わんとすることを判読出来ぬという体験をもつ。しかも，努力して注意深くテキストを読むことによって，始めは漠然としていた意味が次第に明確になるという知覚の変容を体験する。身体の運動的反響が自働的に観念を呼び起こすとは考え難い。

精神と身体の間にある種のつながりがあることは事実であろう。脳障害は精神障害を惹き起こすことがある。だが，上のことからして，過去はそれ自体以外のものの内に保存されるのではなく自己の力で自らを保つということ，私たちの活動に於ては，精神の領域の身体に対する優位があることが認められるのではないか。

---

4) M. M., p. 150. 但し，イマージュという語はベルクソンが M. M., chap. I で用いている特殊な意味ではなく客観的な〈もの〉として考えていただきたい。

私たちは自己の認識—行動の営みに於て，絶えずこの精神の領域に飛躍しこれに訴えることを通して，現在の状況を解決し得る可能な仮説を摑むのである。このような観念が「力動図式（schéma dynamique)」と呼ばれる。今少しこの図式と精神の領域が有する性格を追ってみよう。

図式は現実的なイマージュへと展開される。例えば一連の音声であり書き綴られた文字であり，想い出としての情景である。今，ある術語が呈示されたとする。その語が学問上有する意味を問うことと，その語をかつて誰から聞いたかを問うことは同じことではなく，私たちはその度に異なる努力を行い異なる精神の領域に身を置く。記憶の領域には一種の可能界とも云うべき無数のレヴェルが存在し，各々の領域には支配的な観念というものがある。外面的には同一のイマージュが，その各々のレヴェルに固有の仕方で，そのレヴェルが表出することになるイマージュ群との連合下に存在している。何故，図式は他でもないこのイマージュ群の連合を生むのだろうか。ベルクソンは観念としての図式とイマージュの関係を次のように述べている。

「それらのイマージュの類似は全く内的なものだ。それは意味の同一性であり，問題を解決する同等な能力であり……問題を表象することの役割は，困難さを解決する力に従っていくつかのイマージュを呼び集めることだから，それらのイマージュの外見上の形態をではなく，その力を考慮しなければならない。だから問題を表象する様式はイマージュによる表象に関係づけなければ規定できないけれども，イマージュによる表象とは別の様式である。」[5)]

精神の領域，力動図式の存在様態を対象化によって充全に捉えることは出来ない。それはただ，私たちを前に進め得る力として感得されるのみである。それはベルクソンが精神に固有な存在様式として語る「潜在的（virtuel)」な状態で在る。そこに含まれていたものが展開されて形をとったのがイマージュなのである[6)]。

だが，記憶は如何にして身体を通して現実化されるのであろうか。ベルクソ

---

5) E. S., p. 189.
6) Cf. M. M., p. 272.

ンはこの問題を再認のそれとして考えている。彼が示す再認の過程，心身の協働の有り様を次に見ることにする。それは，身体を有する私たちの生きた活動をその具体相に於て見ることでもある。

Ⅲ

『物質と記憶』の第２章では再認の２つのタイプが区別されている。

一つは対象からの触発あるいは私たちの初発的な意志の衝動が与えられれば自働的に果たされる再認である。私たちの反射運動や草食動物の草一般につねに反応する行動等としてあらわれる再認であり，身体に特定の感覚―運動性連結が再現されることによって起こるものである。これは「習慣記憶（souvenir-habitude)」と呼ばれる。もちろん，このような習慣記憶は後天的・意志的に獲得され得るものでもある。ベルクソンは習慣記憶の例として暗誦されるようになった文章の例を挙げている。

習慣記憶は一旦獲得されれば行為の遂行に努力を要さない。私たちは対象を認めるや否や一連の組織された運動・イマージュの表出を行いこれに応答するのである。このよく組織された運動の感覚が私たちに熟知（familialité）の感じを与える。それは自分が対象を如何に用いるべきかを知っているということであり，また，既成の意味連関の内に対象を配置することでもある。この意味で習慣の内に生きている時，私たちは自らが事物と新たに結び得る諸関係を見い出し得ない。習慣は対象を即座に行動の為に用いることによって，私たちを対象自身から遠ざけてしまう。

だが，ときに私たちは対象そのものに立ち返りこれをよく見ねばならない。それは思いがけないものに出会った場合や学問的探究を行う際に必要とされるものである。このとき行われる再認は，それが注意のはたらきを伴うという点で「注意的再認（reconnaissance attentive)」と呼ばれる。ここで主要な役割を演ずる記憶が，先程から云われてきた精神としての記憶，私たちに対して表象•「記憶心像（souvenir image)」としてあらわれることになる記憶である。この記憶は「純粋記憶（souvenir pur)」と呼ばれ，自働的に（spontané）蓄えられるとされる。強いて先の例と対比させれば，学課の暗誦を習得する過程に

於ける各々のレッスンの想い出である。

身体と精神の協働を見るにあたって，第2のタイプの再認をとりあげることにする。実際，意識が強く顕在化するのは，感覚が自働的に行為へと延長されるのが停止された時である。

身体の切り拓いた現在の状況と記憶を結びつける共通の枠は何であろうか。この枠は運動である。再認とは過去の物質的状況を現在のそれに持ち込むことである。実際，記憶は現実化されるにつれて身体の内に生きようとする。（感覚となり行動器を通して外化される。）このことは別に不思議なことではない。苦痛の思い出が，それを想起する者に実際に痛みを生むことがあるという事例を出すまでもなく，私たちによって「甘い思い出」，「苦い思い出」とも云われ得るものが，身体に反響を及ぼすことは容易に認め得る。だからこそ私たちはときに文字通り「身をよじって」想い出を振り払おうとするのではないか。記憶を喚起し得ることによって，私たちは眼前にはないものを前にした生，そのような身体を生きることがある。それは錯誤を生むものでもあろうが，一方でそのような離脱を行い得るが故に思考実験やイメージ・トレーニングといったものが可能となるのである。

種々の記憶疾患の事例を検討することを通して，ベルクソンは心身をつなぐ如上の枠として，身体に「運動図式（schème moteur)」と呼ぶべきものが存在することを主張する。

この運動図式は2つの側面をもつ。第一の側面は，私たちが半ば無意識的・自働的に行う「模倣の運動（mouvement d'imitation)」である。聴覚であれば，聴き取った語を自らの発声器に結びつけくり返そうとする運動であり（もちろん声に出すまでに至る必要はない)，視覚であれば，対象の輪郭・特徴を再現すべき運動器を模索することである。第二の側面は，私たちが特に注意的と呼び得る活動を行う際に際立つ身体的態度のことである。具体的には，感覚一運動の直結を停止しつつ，作用を伝えてきた対象自身へ我々を返し，その輪郭を追跡しようとする運動であり，現実化されてくる記憶と知覚との間に共通の回路を形成せしめ，両者を相互に対照させるはたらきである[7]。

---

7) 運動図式の2つのタイプについては M. M., p. 107〜9; p. 118; 196 を，また身体の運動性障害と記憶疾患との関係については M. M., chap. II の全体を参照のこと。

私たちはこうして，知覚対象から身体によって反復可能なものを抽出し，現在の状況の大まかな輪郭を描く，（先述のように運動図式のみで応答の形態は決め得ない。）と同時に，精神の領域ではこれに適合し得る記憶を力動図式として摑み，双方の仮説を対照させつつ記憶と知覚を融合させるのである。この作業を通して知覚はおのずから変容される。記憶と結びついて一つとなった知覚は，もはや以前の知覚とは同じではあり得ないからである。この変容された知覚を手がかりに再び如上の作業がくり返され，私たちは対象が孕む意味を自己の精神の奥に探し，実在の相を捉えようとするのである。

上の過程は，ベルクソンが別のテキストで「過去の経験を現在の輪郭に即して曲げつつ用いる事の出来る知性」[8] と呼ぶものの働きであり，それは現在の状況が運動図式にはまり込み得る記憶の特定の面に結ばれ融合するという点からしても，また身体が作働上の閉域を有する点からしても分析と同時に総合のはたらきなのである。私たちは表出すべき応答の形態をあたかも自己を解体すると同時に再構築するというかたちで模索するのである。

感覚性神経と運動性神経の結びつきは，それがくり返し再現されるにつれて強化される傾向があることは一般に認められている。如上の作業を経つつ強化されたこの結びつきが，先述の習慣記憶である。習慣によって私たちは獲得された精神のレヴェルを保つ。また，私たちがかたちをとってあらわれたものを模倣する能力を有していることによって，特定の個体の努力がかち得たものの伝播が可能となり，諸個体がある一定のレヴェルに維持され得るのである。だが，習慣は真正の記憶・精神ではなくただ過去を演じているにすぎない。かたちは，私たちがそれをつくった精神に近づく手がかりを与えるが，かたちの意味を自覚的に摑むには，私たちはこれを自己の内奥にたずね経験し直すのでなくてはならない。

身体的条件の限定を受けつつ精神が如何にして現在の状況に受肉するかの大略は上の通りである。過去が現在と融合するとき，それは，純粋記憶→記憶心像・感覚→物理的形態での表出，という推移を経る。ここで記憶―過去と呼ば

---

8) E. S., p. 188.

れるものについて一つの問いが浮かぶのであり，それは純粋記憶の本性に関る。この点を見ることにしよう。

Ⅳ

記憶（過去）から知覚への漸次的推移を見るとき，両者の間には単なる程度の差しかないように思われる。それはあたかも知覚が微弱化したものが記憶であり過去であることを示しているように見える。現在の知覚が弱まってやがて過去となる[9]。

だが，ベルクソンは過去と現在の間には可逆的あるいは量的でない本性上の差異があることを主張する。苦痛の想い出が痛みを生むことはあっても，私たちは現在の弱い苦痛の感覚を過去の強い苦痛の想い出ととり違えることはないのである。記憶が私たちに感覚を生むからといって即座に記憶を初発的感覚，強度の減じた知覚とすることは出来ぬという。

現実的感覚を生む記憶の性格を，彼はしばしば催眠術師の暗示の言葉にたとえる。彼の言葉が甘い，苦いといった感覚を結果的に惹き起こしたからといって，その言葉が既に甘かった，苦かったということにはならぬ。精神的なものとその所産とのこの関係は，第2章で述べたイマージュと図式の関係と同じものである。記憶は現実化されたものあるいは客体化して捉えられたものの似像としてあるのではない。

知覚が次第に色褪せて過去になるのではないとしたら，現在はいつ過去となるのであろうか。ベルクソンは次のように主張する。「私たちは回想の形成が決して知覚の形成よりもあとではなく，同時であると考える。」[10]

実際，もしそうでないなら，私たちは現在が退き未来を迎えること，この現在のこの過去が構成されることの理由を理解できぬであろう。〈いま〉という瞬間の根底には「現在の記憶（souvenir du present)」ともいうべき過去があるのでなくてはならない。

---

9) 過去の構成については E. S. 所収の 'Le souvenir du présent et la fausse reconnaissance' を参照のこと。

10) E. S., p. 130. 傍点部は原文イタリック。

「私たちの現実の存在は時間の中に繰りひろげられるにつれて，このような潜在的な存在によって，すなわち鏡の中の像によって二重にされる。だから私たちの生活のすべての瞬間は二つの面を示している。すなわち現実であって潜在的であり，一面において知覚であり，他の面において回想である。私たちの生活のすべての瞬間は繰りひろげられると同時に二つに分かれる。と言うよりもむしろそれはこの分裂において成立する。なぜなら現在の瞬間はいつも進行していて，すでになくなった直接の過去と，まだない直接の未来との逃げ去る境界なので，現在の瞬間がたえず知覚を回想として反映する動く鏡でないとしたら，現在の瞬間は単なる抽象にすぎないものになるだろうから。」[11)]

別のテキストでは次のような言葉がある。

「本当をいうと，それがどんなに短いものであれ，二つの瞬間を分ける持続と，二つの瞬間を結びつける記憶とを区別することは不可能である。なぜならば，持続は本質的には存在するもののうちにはもはやないものの連続であるからである。」[12)]

純粋記憶は個別の現在として認められる諸々の出来事を可能にする条件としてある。つまり一の瞬間と二の瞬間の他性を生み，歴史というものを可能にする。私たちは，自分が時間の内にあり，歴史を有していることを認めている。時間が存在せぬこと，それが私たちの幻想に過ぎぬことが決定的に実証されぬ限り，純粋記憶は私たちが生きているこの世界の根拠としてある。それは「普遍的（一般的）過去（passé en général）」である。私たちが自らの進む方向を受け取るべくそこに飛躍する記憶は上のような性格を有する存在であり，この存在とのつながりを保つことによって，私たちは生きているのである。

世界がどのような相をもって現われるかは，私たちが世界と主体的にどのように関わっているかと切り離せなかった。それは私たちのからだ全体を巻き込んだ事態である。身体と精神が有する性格と両者の協働によって，私たちは自

---

11) ibid., p. 136.
12) D. S., p. 62.

己の認識と活動・自らの存在様態を変更し得るのである。私たちは自働機械ではない。とはいえ，習慣の内に無自覚に生きる時，即ち既成のものを自己同一的に繰り返すばかりの時，時間は流れず，私たちの意識は眠っている。習慣の変更・以前と異なる生き方が要請されるのは，通常，おのれが従う意味連関に矛盾すると思われる存在に出会う時である。私たちがそのような相手と交流し得るには，単に眼前のものを観るだけでなく，自らの奥底にそのものの存在をたずねなければならない。これは何も大袈裟なことではなく，歩いている私の前にふいに何者かが飛び出した時や会話を交わしている時などに日常的に行われていることなのである。だが，精神のレヴェルを選択し得る私たちは眼前の者の存在に目を閉じることもまた出来る。私たちに相手の受容を促し，お互いを含むより広い円環の形成を要請するものは何であろうか。ベルクソンはそれを個人的な感情をこえた創造的情動，対象を選ぶことのない普遍的な愛の感情だという。だが，そのような「情動（émotion）」[13] の存在を確実なものとし得るのは，それらが語られた『道徳と宗教の二源泉』の詳細な分析だけでは充分でなく，私たちが実際にそのものが自己の奥底に潜んでいることを見い出し，これをはたらかせ続ける場合のみである。私たちは如上の精神にかたちを与えることが出来るのだろうか。

脚註に示されたベルクソンの著作略号は以下の通り。またページ数はP. U. F. 版単行本のそれを示している。

M. M.＝Matière et Mémoire.

E. C.＝L'Evolution Créatrice.

E. S.＝L'Energie Spirituelle.

D. S.＝Durée et Simultanéité.

M. R.＝Les Deux Sources de la Morale et de la Religion.

（やました　さとし　博士後期課程一回生）

13）émotion については M. R., p. 35 以下の記述を参照のこと。